

「ハレとケ」通信

第21号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です。

物語のある建築（21）

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

「—現存最古の煎茶席—

中津万象園茶亭　観潮樓

「ハレとケ」のある　暮らしかた

【一年の始まり・無病息災を願つて／節分】

中津万象園「花の歳時記」

【晴嵐の島北側に咲くツワブキ】



平成25年12月発行

2012年2月の雪の日に、
弊社女子社員の作った「雪うさぎ」。
目や耳は、本社玄関先の南天製。

「現存最古の煎茶席」中津万象園茶亭　観潮樓

「中津万象園の茶室は、国内最古（現存）の煎茶席だった」というニュース。

先月（平成二十五年十一月十四日）、四国新聞の記事を皮切りに、NHKなどマスコミ各社に相次いで採り上げられた俄に注目を浴びたこの茶亭ですが、つい数年前までは「茶室＝抹茶のための建物」だと当然のように考えられてきました。その固定観念を覆したのが、平成二十年に来園した、尼崎博正氏（京都造形芸術大学教授）、小川後楽氏（小川流煎茶家家元）、麓和善先生（名古屋工業大学教授）、矢ヶ崎善太郎氏（京都工芸織維大学）、武藤夕佳里氏（京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター研究員）らによる指摘。そして、それをきっかけに、新しい視界が開け始めました。

今回の「物語のある建築」では、「この江戸後期の茶室をめぐる『お殿様の物語』」を紹介します。

（本物語についての調査は、眞鍋 有紀子、武藤夕佳里（並河靖之七十五記念館学芸員、京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター研究員）、繩椎 貴靖（風景意匠研究所、繩椎貴靖アトリエ代表・ガレリー・アポテーク主宰・古島工業大学非常勤講師）、岡村 梨加（岡山県教育委員会岡山県立博物館）が、平成二十四年度福武学术文化振興財団の助成を受けて行った）

国内最古の煎茶席

江戸後期の初めごろ（18世紀後半）に建てられたとみられ、幕末から明治にかけて流行していく煎茶文化の非常に初期の特徴を残す煎茶席として文化的価値は高いと評価している。

観潮樓は、池にせり出し入り母屋造りの中2階の高床式建築。庭に面する2方の障子を開けると外の景色が対照的な煎茶席の特徴を示している。

江戸中期に國內に広がり、幕末ごろから大流行したとされている。教授が確認した古い煎茶席は全国で50棟ほどあり、これまで日本に伝えた喫茶法。江戸中期に國內に広がったことによる可能性は十分にあるとしている。

◆中津万象園を作った人

中津万象園の築庭を始めたのは、一六八八年、丸亀藩京極家2代目藩主 高豊侯。彼は、父の死後8歳で家督を継ぎ、絵画に堪能、その才能は天才的だったといわれている人物です。

観潮樓には建設時の岡面も少なく、老朽化によりかやぶき屋根などの損傷が激しいことから、丸龜市は本年度から修理・復元に向けた補助事業を着手。教授の研究室に依頼して実測調査と破損状況の確認などを行っている。

【中津万象園の成り立ち】
茶亭「観潮樓」についての物語。

その前に、この「中津万象園」（丸龜市指定名勝）という場所の歴史を少しだけ振り返ってみましょう！

中津万象園とは、丸龜市中津町にある一万五千坪の庭園の愛称で、近在の例で言えば、栗林公園や後楽園と同様、江戸時代の大名庭園です。近江八景を模したと言われる島々を結び、巡りながら楽しむ仕掛けで、海浜に位置し、「汐入」であることの庭の特徴です。

では、そんなお庭を作ったのは、誰で、そしてどんな人だったのでしようか？



修理・復元に向け実測調査が行われた観潮樓＝丸龜市中津町、中津万象園

江戸後期 初めごろ 名工大大学院 教授が確認



↑2代目藩主京極高豊侯の肖像

◆高豊侯と仁清

この高豊侯は、実は仁清窓と深い係わりを持っています。仁清の数々の傑作は世界中で愛されていますが、それらの誕生の契機となつたのが、彼の存在といわれています。

というは、19歳の時に、桜田久保町の上屋敷を建設した彼は、館を飾るため田中八兵衛へ鳳凰、牡丹、菊、四季山水、吉野竜田などを題材にする華やかな屏風類を発注します。そして、この八兵衛の描いた下絵をもとに、その世界を陶芸で表現しようと京都に清で作品を製作させたことが、新しい芸術を生みだしたと考えられています。

高豊侯の「絵心」が生んだ素晴らしい芸術。この万象園を造った時にも、一幅の絵のように完成した姿が高豊侯の脳裏には浮かんでいたのかもしれません。

【大名庭園『中津万象園』の役割】

さて、いわゆる「大名庭園」と呼ばれるお庭を訪れたとき、「広いなあ、何のために?」と思われた方も多いのではないでしょうか。また、「京都のお庭」と比べると、大まかで雅趣に欠ける」と評する人もいます。でも、大名庭園はそうではありません。秘密はその「用途」にあります。



↑中津万象園全景

◆大名庭園の一般的な役割

大名庭園とは、「眺めて心和む空間」であると共に、大名の身分、職分、地位を維持するために必要な饗応の装置つまり「公的な儀礼空間、社交のための空間」であったと考えられています。

園内には茶室や四阿がありますが、それは政治的な密談を含む儀礼・社交の場として接待を行ったり、相手をもてなす饗応の場として使うため。広い芝生や空間があるのも、同じ理由です。

また、御成の記録の中には、日常的にお城の外へは出られない将軍や奥方様のために、茶屋や草庵風の建物などを使

「琴峯詩集」にも中津万象園の出てくる詩は多く、歴代の藩主からも愛されていましたことが分かります。また、大名庭園としてはスケールが小さいことから、「お接待のための公式な場所ではなく、お殿様が純粹に楽しむためのお庭だったのでは?」との見解もあります。

今回煎茶の席としては現存最古と言われた茶室は、5代目の高中侯の頃にできたと思われますが、建築された頃には、「自然往来の際に静かに拝観するのは良いけれど、弁当や酒を持って来て大騒ぎをするようなことをしてはいけないよ」という趣旨のお触れも。

普通は入ることのできない大名庭園には珍しく庶民にも親しまれた場所であつたことが想像され、それも特徴的だと考えられています。

い、まるで映画村のロケセットのように非日常を演出した記録もあります。

つまり、大名庭園とは、眺めて楽しむだけではなく、遊び、利用するための庭であり、京都の庭とは目的が違っているのです。

◆お殿様、庶民に愛された万象園

では、今回の物語の舞台、中津万象園はどんな場所だったのでしょうか。

6代目藩主の高朗（琴峯）侯の詩集、

「琴峯詩集」にも中津万象園の出てくる詩は多く、歴代の藩主からも愛されていましたことが分かります。また、大名庭園としてはスケールが小さいことから、「お接待のための公式な場所ではなく、お殿様が純粹に楽しむためのお庭だったのでは?」との見解もあります。



↑今回「煎茶席」ということが分かった觀潮樓

【お殿様の遊び、楽しみ方を探る】

お殿様が楽しむための、親密な空間、中津万象園。でも、歴代のお殿様は、このお茶席やお庭をどうやって楽しみ、利用していたのでしょうか。

それを探るために、あるお殿様に注目したいと思います。今回の物語で採り上げるのは、6代目藩主、京極高朗侯、号を琴峯さんという人物です。（在位期間一七九八～一八七四）

お殿様が楽しむための、親密な空間、中津万象園。でも、歴代のお殿様は、このお茶席やお庭をどうやって楽しみ、利用していたのでしょうか。

◆なぜ、琴峯さんに注目するのか

7代続いた京極家代々の中でなぜ6代目の高朗侯を選んだかと言えば、まず

第一に、茶亭の建築年度は5代目の高中侯の頃と見られており、高朗侯の時代には確実にこの茶亭が存在したこと

その理由です。また、

①江戸後期と比較的時代が近く、資料が残っている」と

②琴峯詩集という漢詩集を残しており、それを読み解くことで、高朗侯が何を考え、好み、生活していたのかが見えてくると思われたこと。

③代々藩主の中でただ一人丸亀市に

お墓があり、「丸亀を愛したお殿様」であるという意識が、地域の人々にも根付いていること

という理由も挙げられます。

「京極藩のお殿様」という漠然とした概念でなく、「京極高朗さん、又の名を琴峯さん」として個人で捉えてみれば、皆さまにもより歴史に、そして京極家の残した江戸の文化に親しく興味を持つていただけるのではないか?

そこで、今回の物語では、「琴峯侯」に注目してみましょう!

さらに、私は、文化は「遊び」と親密な関係にあると思っています。ハレの遊び、ケの遊び、いずれにしても、「遊び」といふたものと密接に関係していなければ、その文化は後世に残らないと思うている



↑16代目藩主高朗侯（琴峯）

からです。そこで、今回は、「遊び」という要素にも注目してみます。
さて、では、琴峯侯の趣味、遊びとは、なんでしょうか?・また、当時はどんな時代だったのでしょうか?

◆琴峯さんとはどんな人?

琴峯侯のよく知られた趣味。それは、「漢詩」です。一生のうちに一万首を超える漢詩を残していると

言っているくらいで、その評価は全国に名高いものでした。

参勤交代の行き

帰り、また、場内で詩会を催したり、領内のあちこちへ詩の題材を求めて出かけたり…。詩の題材を求めるのに物々しい供回りでは相応しくないと、常に極僅少の伴回り、軽装歩行または数名の騎乗で出城し、「大名だか何だか分からない」という様子でいることもあったそうです。

その様子のよく分かる詩をひとつ、彼の詩集「琴峯詩集」から紹介します。

* * *

赤穂義士連上口占墨（四巻より）

水滸山容霧後可。商一臺好景一歩遅々。狂花纏在枝頭放。已被林禽盡得知。秋晚村々禾稼黃。三農應臺威豐穢。喧々鼓笛叢祠下。數片風簾閃夕陽。雲霧籠林未放晴。山光黯淡水光明。誰知詩客風流趣。雨笠煙蓑求句行。



↑琴峯詩集（全8巻）

山水の景色は雨が上がりながらが優れてる。よい景色をあれこれと眺め考えながら、歩みは自ずと遅くなる。枝先にはわずかの狂花（季節外れに咲く花）が咲いているが、（そのようなことは）聰い野鳥はどうの昔に知り得たことである。晚秋、農村の稻穂は黄金色。三農（平地農・山農・沢農）は豊穣の一年を喜んでいる。喧しい程の太鼓や笛の音が叢祠（小さな御社）に響き、数片の幟が夕陽に閃いている。雲霧は林にこもって未だ晴れ渡らずにいる。山容は暗く水辺は輝いている。詩人の風趣を誰が知つていようか。煙雨を帯びた笠と蓑で詩句を考えながら行く。

* * *

琴峯詩集にはお殿様の趣味や楽しみ、いわば「体温」を伝える詩も多く、知れば知るほど琴峯侯が身近に感じられ、あたたかい気持ちになります

◆大好きなお角力

琴峯侯の趣味としてもひとつよく知られたものが、それは、「御角力」です。江戸における丸亀藩お抱えの角力は常に幕内5、6名もあり、他にお入りと称する角力が、十数名もあつたとか。これが力士が京極家の四ツ目の紋入り黒羽一重で装い藩主の江戸入りを迎えた様は、江戸っ子の一見物として喧伝されていました。

また、地元・觀音寺出身の丸亀藩お抱え力士、平石七太夫が、回向院の場所相撲で相手力士を投げたのを見て大喜び。手を打つて躍り上がったことが評判となり、「大名としてあるまじき振る舞い」と、以後は諸侯の回向院相撲観覧が禁止されてしまったともいいます。以来、藩主はお角力方を十数名派遣して、角力場所の状況を実況中継のようすに早馬でリレーさせたりもしたそうです。（参考文献「詩人琴峯侯と讀岐」堀田璋左右）

そして、もう一つ、琴峯侯を身近に感じるエピソードを紹介。嘉永元年（一八四八年）の御乗廻（領内巡視、御成での出来事です。普通、お殿様の食事は専属（直属の料理人が担当するのですが、このとき琴峯侯は、「ソノ（宿泊先）の料理方の作ったヌードーが食べたい」と希望しました。

そして出てきたお吸物（あらい味噌、結びきす子、生松露）に「おいしい!」と感動した琴峯さん、2杯お代りをしたあげくに、「明日の朝も、これと同じものが食べたい」とリクエスト。料理場は大

以上より、琴峯侯が「前茶」遊びをしていたといつてが想像され、また「観潮樓」は現存する中で一番古い「前茶の遺構」であるといつてが、今回の調査で明らかになつたのですが、（但し、当時の呼び名が観潮樓であつたかどうかは分かりません）、この観潮樓、あるいは中津万象園で琴峯侯が時を過ごしたというエピソードはあるのでしょうか？

—それもまた、「琴峯詩集」の中にはりますので、いくつか挙げておきます。

* * *

中津即興（一巻より）

雨霽海天煙靄。布帆片々掛輕風。

水涵一岸竹一枝々翠。霜染一庭楓一葉々紅。捲レ箔日光來一席上一。凭レ欄雲影落一杯中一。數聲漁笛知何處。一葦舟過蘆荻東。

雨が上がり、雲と靄が海と天のはざまで融け合い、彼方此方に浮かぶ帆掛舟は、軽生える竹林の根元を濡らし、樹々の枝は碧色に輝いている。降霜は楓の葉を染め、紅一色である。簾を上げると日光が座上に差しこみ、欄干に凭れれば杯中の酒に雲影が映る。魚笛が数声聞こえるが、何処から聞こえてくるかは分からぬ。葦舟が一艘生い茂る蘆荻の東を過ぎて行く。

◆ 明治以降の中津万象園
その頃の様子を伝えるものとして、明治四十一年の「讃岐めぐり」、同四十五年の「琴平按内讃岐遊覧」、大正五年の「丸亀」丸亀商工案内……といった「觀光ガイドブック」があります。それらの中

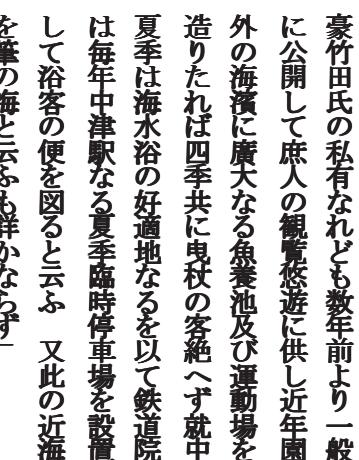
中津莊即時（六巻より）

曲々闌干枕一碧連一。樓頭對レ景鑒一吟肩一。破荷葉上蜻蜓立。折葦叢間鷺立（シ十鶴眠。雲影過來帆影沒。松聲收盡水聲傳。書圖至青雞一摸寫一。移在一先生詩句邊一。

曲がりくねつた欄干が、碧色の波に映えている。高樓は景色の中で詩人の肩をいかせて誇示しているかのようだ。裂けた蓮葉にトンボがとまり、折れた葦の茂みで水鳥が休んでいる。雲が広がってきて帆影が見えなくなつた。松をわたる風の音が止み、流水の音が響く。書や絵でもこの情景は写し難い。しばらくしてから先人の詩句を思い出した。



↑万象園夕景。この景色は夕陽の沈まない栗林公園では見られない。



↑「讀岐めぐり」

「ハレとケ」のある遊びかた・暮らしかた

この季節を暮らす。(21)

【一年の始まり・無病息災を願って／節分】

一月三日に豆まきをして「鬼(邪氣)」を払う行事、「節分」。数ある行事の中でも人気が高いものですね。「鬼は外!福は内!」の掛け声とともに、鬼の面をつけた大人に向かつて、張り切つて豆を投げています。

大人に向かつて、張り切つて豆を投げている子どもの顔を思い出します。
節分は昔、「せちわかれ」といつて、二十四節季の立春・立夏・立秋・立冬の前日をさしていました。旧暦では立春を四季が一巡りした一年の最初の日である正月と同じ意味を持ち、平安時代には大晦日に陰陽師が旧年の厄や災難を祓い清める「追儺(ついな)の儀式」として重要な行事でした。鬼(邪氣)を追い払う節分行事として、民間にも定着してきたのは室町時代からです。

年四回ある「せちわかれ」が、立春の前日だけ節分行事として残る様になったのは、暮らしの中でもっとも重要だったからというわけですね。

◆なぜ豆をまくの?鬼の正体は?

◆豆まきの作法

・神棚があれば炒った豆をまく日の朝から供えます。神棚がなければ目線より高いところに白い紙を敷いて供え、豆をまくときは「益々繁盛する」ように豆を盆に入れます。

・夜になってから戸口や窓、ベランダから

外に向かつて豆をまきます。一家の主人や年男年女がすると吉と言われますが、

家族にいなければ皆でまいてかまいません。外に向けて「回 鬼は外」と言いながら豆をまき、追い出した鬼が入ってこない

様に窓とドアはすぐに閉めます。それから内に向けて一回、「福は内」と言いながら豆をまきます。

・豆まきの後は無病息災

を祈つて歳の数、または自分の歳より一つだけ多くの魔を祓うために豆をまくのです。そして鬼は丑寅(北東の方角)に棲んでいたところをさし、丑寅は時刻でいうと夜中の2時~4時をさし、方角でいうと北東となるため、鬼は夜中に北東から来ると考えられ豆をまくのは夜となりました。鬼の姿が丑の角と寅のパンツ姿になったのも、丑寅の説からです。

（文・曾我部みどり）

節分の鬼とは季節の変わり目に起こしやすい病気や厄災=魔のことをさし、この魔を祓うために豆をまくのです。そして鬼は丑寅(北東の方角)に棲んでいたところをさし、丑寅は時刻でいうと夜中の2時~4時をさし、方角でいうと北東となるため、鬼は夜中に北東から来ると考えられ豆をまくのは夜となりました。鬼の姿が丑の角と寅のパンツ姿になったのも、丑寅の説からです。

先に書いたのは一般的な作法ですが、東北

では雪の中で探しやすいように落花生をまいたり、ひいらぎの葉が鬼の目を刺し、いわしの頭の異臭が鬼を近づけないと考えられ、現代でもひいらぎの小枝にいわしの頭を焼いて刺す「やいかがし」を門口に飾る習慣も残っています。また、地方には全国から追い出された鬼を迎える町も



「花の歳時記（21）晴風の島北側に咲くツワブキ」

庭園を西へ進みますと、やがて池の中では最も小さい島「雨の島」が手の届くような位置に迫ってきます。その島に架かる切石橋から西方を望んでください。黒松の巨木に鬱蒼うつそうと覆われた園内最大の島「晴風せいらんの島」と共に、その北側の岸边に咲く黄色い花の群落を目にすることが出来ます。この草花がツワブキであります。

日当たりの良い所で咲く桜のツツジ・バラ・ボタン・チューリップ等のような豪華さはありませんが、多くの花が姿を消したこと、寒風にじっと耐えて黄色の頭状花を力いっぱい咲かせています。このひたむきな生き方に大きな感動すら覚えます。

ツワブキは、本州の日本海側では石川

<中津万象園・丸亀美術館へのアクセス>
瀬戸中央道路 坂出北ICより約8.5km／約15分
坂出ICより約14km／約20分
高速道路善通寺ICより約5km 約10分



【長岡 公 氏】

昭和2年10月 香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和26年3月 鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和26年4月以降 香川県公立高等学校教員として
主基高等学校・飯山高等学校・
笠田高等学校・農業経営高等学校教諭、
高松南高等学校・飯山高等学校教頭
昭和63年3月 定年退職 香川西高等学校教頭
現在 公益財団法人中津万象園保勝会 理事
※主な著書に
「讀岐の名園紀行」(栗林玉藻編／中・西讀編)がある。

県、太平洋側では福島県以南と、四国・九州・沖縄県など暖地の海岸付近に分布しており、これらの地方では、潮風が強く当たる海岸の崖などにしがみつくようにして自生している状態を良く見かけます。温暖な気候・潮風・砂地、この3点がツワブキの生育条件のキーワードであろうかと思します。とすれば、この晴風の島北側の岸辺は、ツワブキにとって最適の生活環境であるといえましょう。

ツワブキの和名は、その葉がフキに似てつやつやと光沢があることから当初は「ツヤブキ」と呼ばれていたのが次第に訛(なまつて)「ツワブキ」になったといわれています。またツワブキは、昔から食用や薬用として人間生活に利用されてきました。

(長岡 公)

「枯野」

日本人の季節を感じる心、美しいと感じる色彩感覚。

古来より季節を感じさせた「色」を知る。



表:黄／裏:淡青
着用時期は冬。雪や霜で樹木が

黄枯れてゆく寂寥たる野の風景を写した色目です。

【編集後記】 今回の観潮楼の建物について、ぜひ、記憶に留めていただきたい視点があります。それは、「今残っている建物のあり方から、当時の文化や楽しみ方を推理する」、いわば逆算ともいえる発想があるということ。そのことは、建物には本来、文化や社会、人生、美意識が反映されているということを意味します。私は、

「建築には文化・社会・風景・人生・生活を変える力がある」と信じていますが、人・サービスなどのソフトが世の中を変えていくことはもちろん、建物や景観・環境などのハードが働きかける影響力も大きいと考えています。今流行の言い方をすれば、建設業はソーシャルビジネス（地域社会の問題解決ビジネス）となりうると信じているのです。先般、当社の社員に「建築への想い」を尋ねたところ、「一生の仕事」と答えた社員が何人もいました。富士建設の社員は、お客様の建物を建ててほしい、「住宅であれば「幸せになつてほしい」と思ながら携わっています。「建築の持つ力を信じる」。良い建築には、世の中を変える力があります。

*****御意見、御感想をお聞かせ下さい*****



建設業許可:香川県知事許可(特23)第189号
／一級建築士事務所:香川県知事登録 第416号
／宅地建物取引業者登録:香川県知事登録(10)第1997号

富士建設株式会社

本社:〒769-1101 三豊市詫間町詫間300番地1
TEL0875-83-2588(0120-832589)

FAX0875-83-5864

<http://www.fujikensetsu.jp>

mail y-manabe@fujikensetsu.jp (真鍋有紀子)

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する木造五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において1300区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所:高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所

■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭